

第6号

● 目次 ●

論点：分離融合について —工学系の立場から—	1
萬華鏡：ロシアの中の日本文学	2
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」・「モンゴル」・「中国」・「朝鮮地域」	3
日本館便り	4
東アジア伝統文化の伝承相を比較する	5
最近の講演会	6
センター動向	7
客員教授紹介	7
活動風景	8

分離融合について —工学系の立場から—

東北大学 東北アジア研究センター 教授 佐藤 源之



“分離融合”について巻頭言を書くようにe-mailで指示を受けた。“文理融合”のことと想像したが、あまりに難しいテーマだから書けないとお断りしたらテーマは何でも構わないから書けと再度指示を受けた。何でもいなら“分離融合”について書くことにした。

私の専門は電波応用計測、とりわけレーダを用いた地熱・資源開発や地下水・地下環境計測であり、工学分野への応用研究を主に行っている。十年ほど前から遺跡探査にかかわる研究を始めた。科研費の重点領域研究として始まったプロジェクトが直接のきっかけだったが考古学者を代表とする文科系研究者から工学、農学、食物学、理学など多彩な研究メンバーが集まる。酒を酌み交わしながら地中レーダで何ができて何ができないのか議論をしているうち、話している言語の違いに気がついた。

理科系研究者にとって哲学者の文章が難しいというようなことではない。例えば電波の正体について高校の教科書には“電場と磁場でできる”と書いてあるが工学部の講義で使う教科書には“電界と磁界の時間変動で発生する”とある。これらはよく知られている理学と工学分野での用語の差であるが、その上“電波”と“電磁波”という用語もあり、ここに至っては研究者の好みである。ところが傍で聞いている歴史研究者にしたら電波には何種類もあるかと思うかもしれない。それでも、この例は同一の物理的概念に対する用語の違いに留まる。

より本質的な問題は、異なる表現が常に異なる概念を示すとの思い込みにある。塩水をつくることにした。栄養士は塩と水の量をスプーンで計り、電気屋はできた塩水の導電率を計った。コックさんは塩水を舐めて塩辛さを調節するだろう。異なる分

野の研究者が互いに接点を探りつつ、同一の本質的概念に達したとき、文理融合の可能性が見えてくる。計量スプーンも導電率メータも塩水の塩辛さの多面的な切り口を表しているが、コックさんが導電率のデータ表を見せられたとき塩水の塩辛さを思い起こすかどうかは鍵となる。ちなみに、遺跡探査のプロジェクトでは分野を横断する統一用語集を作ることとした。標準語辞書である。写真に仙台城石垣改修工事に先立って我々の研究グループが本丸跡で実施した地中レーダ実験の様態を示す。最近、伊達政宗時代にまで遡る石垣の発見が報じられたが、我々のレーダは改修工事開始前に埋没していた石垣の上部を捉えることができた。

工学系の立場で文理融合とか学際研究とかいう用語を改めて使う必要はない。こうした視点がない研究は終始自己満足に過ぎない。



仙台城本丸跡で実施した地中レーダ実験。



ロシアの中の日本文学

東北アジア研究センター客員教授・
ロシア科学アカデミー世界文学研究所首席研究員 キム・レチュン

今日ロシアの知識人たちの教養において、日本文学はもう欠くことのできない存在である。紫式部、松尾芭蕉、石川啄木、芥川龍之介、川端康成その他多くの日本人作家の作品が翻訳され、その発行部数は数千万部にのぼる。ロシア全土の図書館で日本の小説が読まれるようになり、俳人松尾芭蕉は個人の書斎を飾っている。日本文学・文化がロシア人の日常生活の中に入ってゆく。20世紀の初めに西洋文化が普通の日本人の日常生活とつながっていったように。

東西両大陸にまたがっているロシアは、地政学的立場から見ればユーラシア大国である。その歴史はアジアと深い関連を持っているばかりでなく、文学・哲学には東洋的要素が多分に含まれている。ロシア文学がアジア諸国の読者に深い親近感を呼び起こすのは偶然ではない。同時に東洋文化に対するロシア人の関心はもともと強い。

日本文学がロシアで読まれ始めたのは、それほど遠い昔ではなかった。確かに20世紀の初めまでは、日本文学はロシアの読者にとって辺境の文学であった。1907年、徳富蘆花の小説『不如帰』がフランス語から重訳され、『私は生きたくない』というタイトルで出版された。この小説は文学作品として読まれたというよりは、遠い東の国で起きた「珍奇な」家庭事件が異国情緒を誘うエキゾチックな読み物として受け入れられた。

20～30年代には、谷崎潤一郎の『痴人の愛』とか、有島武郎の『その女』、プロレタリア作家たちの作品が紹介されたが、日本文学の「発見」には至らなかった。日本の小説は限られた専門家たちの域に留まっていた。

ロシアの広範な読者層が日本文学に強い興味と関心を向け始めたのは、戦後の60年代後半からであった。

当時、ソ連の読書界における阿部公房のデビューは見事だった。知的文学を求めていた多くの読者たちは、『砂の女』



芭蕉像の横に立つ筆者
(岩手・平泉の中尊寺にて)

をむさぼり読んだ。実存主義文学の傑作として高く評価された日本「戦後派」の作品集は数多く出版された。野間宏、堀田善衛、大江健三郎その他多くの作家の作品が広く読まれた。

60～70年代に、旧ソ連科学アカデミーは9巻より成る『全世界文学史』の編纂を始めたが、それに先だって

200巻の『全世界文学全集』を刊行した。編集の方針において、ヨーロッパ中心主義的立場が徹底的に否定された。全集には東洋の古典が大きな位置を占めている。

日本文学は『伊勢物語』から始まり『源氏物語』、近松門左衛門の戯曲、芭蕉の詩篇、その他多くの古典的作品が世界文学の遺産として含まれている。20世紀の世界文学シリーズには、東北アジアの作家のうちただ二人—芥川龍之介と魯迅の選集が別巻になって出版された。

東洋に対するロシア読者の関心は、主に東洋の古典に向けられているというのが一つの特徴であろう。20世紀の東洋文学を西洋の「模倣」と見る傾向は西欧の見方と同じであるように思われる。川端康成は、日本古典の伝統を背負う作家としてロシアの読者に迎えられ、川端文学と現代世界文学との関わりについては、顧みられることがほとんどなかった。川端は日本の古典の美の世界の輪郭から外に出ない作家として受け取られた。全集の20世紀世界文学シリーズには川端の名は見えない。

もちろん、川端の文学は日本の美と伝統を基底にしており、それがロシアの読者に喜び迎えられた。しかし、現代に生きる日本の美は、狭い民族的な枠内に留まることはない。その時、文学は衰退する。伝統と現代の総合が日本文学の根本的課題であった時代に生きた川端康成は、20世紀の文学的実験に対して敏感であった。世界文学をコンテキストにして川端の創作を再考しようとする考え方が強くなっている。

多種多様な流れが大洋をなして現代日本文学を形成する。川端康成と大江健三郎のノーベル賞受賞記念講演は対照的であった。川端は「美しい日本の私」を創作の根源とし、大江は「あいまいな日本」の探求を志向する。そして二人の日本作家は、東・西に広く読まれている。

ここで私は野口米次郎の論文「世界における日本文学の地位」を思い出す。「私ども日本人が文芸上に世界的地位を要求する場合には、日本人特有のものを提供しなければ駄目である。言い換えれば、中国とか西洋の影響以前の日本文学の産物、少なくともその影響の薄いもので世界的地位を争わなければならない。」

この論文が書かれたのは1932年、近代日本文学はまだ50年を越えていない時代だった。世界における現代日本文学の価値を云々するには時期尚早であった。

大江健三郎にノーベル文学賞が授与されたことは、20世紀の世界文学発展のプロセスと密接につながり合って発達した現代日本文学の高さが、世界に認められたことを意味するものであろう。

AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから 2000年の日露関係

エリツィン大統領の辞任演説から始まった今年の日露関係は、これまでとは違う雰囲気の中で迎えられた。いうまでもなく、「2000年までに平和条約を締結する」という両国首脳の合意が果たされるのかどうか、多くの疑問と一縷の望みが入り交じりながら、各界から注目されているからである。当センターの主催によるものを含め、「エリツィン時代の終わり」（東京：法政大学）、「エリツィン後のロシア：日露関係の展望」（仙台：東北アジア研究センター）、「日露新時代」（札幌：毎日新聞社）など、ロシア側の要人を迎えた国際シンポジウムが各地で行われている。興味深いのは、「両国史上、今ほど良好

な関係はない」（パノフ駐日大使）ときに、平和条約を結ぶことの難しさである。むしろ対立の時代に、さまざまな理由から双方で譲歩が引き出しやすかったときに結んでいればと考えるのは、皮肉すぎる見方であろうか。（当センター主催のシンポジウムは8月に出版を予定している。）

（徳永昌弘）



講演するパノフ大使

モンゴルから モンゴル国の総選挙

7月2日、モンゴル国で4年に一度の国家大フラル（国会）総選挙が実施された。結果はナンバルィン・エンヘバヤル党首率いる野党人民革命党が76議席中72議席を獲得して大勝した。旧連立与党民主連合からの当選は在任中腐敗追及に意欲を見せた元首相ナランツァツァラルト氏のみ。民主連合政府の首相経験者エンヘサイハン、エルベグドルジ、アマルジャルガルの各氏や大フラル議長ゴンチグドルジ氏は軒並み落選した。総選挙委員会の発表によれば、投票率は81.37%。投票率が最高だったのはホヴド県第44選挙区の98.9%、最低は首都第54選挙区の70.2%である（オドリーン・ソニン紙7月4日）。前回1996年の選挙での首都の投票率は90%というから、四年間の民主政府への失望は、首都で顕著に現れた。有権者は与党が強調する経済改革の成果より、要人の腐

敗・不正や政治的な混乱に審判を下したのである。春の世論調査の段階で既に人民革命党の勝利は確実視されていたが、これほどの地すべりの勝利は、人民革命党自身にも予想外だったようである。新政権の首相には人民革命党首N.エンヘバヤル氏が本命であるが、大統領N.バガバンディ氏に近いとされるSh.オトゴンピレグ氏の名も取り沙汰されている。エンフバヤル氏は42歳。人民革命党がかつての共産主義政党でないことを強調し、生活の安定に配慮した漸進的な経済改革を主張して支持を集めた。同氏はトニー・ブレア首相のファンで、イギリス・リーズ大学留学中英文学を専攻、ディケンズやウォルーフ、ハクスレーの作品を翻訳した。自ら仏教徒であると語り、現在もプラトンや池田大作の著作を翻訳中とのことである。

（岡 洋樹）

中国から さまざまな中国語

方言の違いは日本にもある。だが国土の広い中国のこととなると、もはや「方言」などといって済まされないほどのさまざまな中国語が国土のあちこちで話されている。特に長江（揚子江）から南の地域では、方言の多様性が著しく、広東語や上海語や福建語、客家語などなど、様々な方言があり互いにほとんど会話が不可能なほどの違いがある。

言葉の通じない状態を、広東語では「鶏同鴨講（カイトーンギャップコーン）」（ニワトリとアヒルがお話をする）と表現するが、例えば北京の人がいきなり広州の雑踏に立つと、さしずめニワトリに囲まれたアヒルの心境に陥

ることになる。

他方で、複数の方言を話せる人の「使い分け」もまた見事である。例えば、職場での仕事の会話は標準中国語、家庭内では広東語、同郷出身の運転手とは客家語というふうな、完璧に使い分ける人もいる。一般的に言って、高学歴で要職にある人ほど多種の方言を使い分ける傾向がある。コネや縁故関係の巧みな活用が物を言う中国社会において、相手に応じ状況に応じた方言の使い分けが、成功するための手段ともなるからであろう。

（瀬川昌久）



朝鮮地域から 韓国、人口統計発表

韓国統計庁はこのほど「世界および韓国の人口現況」を発表した。それに依れば2000年7月1日現在韓国人口は47,275,000人である。これは世界で第25番目。人口密度では476で世界第3位である。

うち、65歳以上のいわゆる高齢者人口を3,371,000人としている。これは全人口の7.1%に当たり、昨年の6.8%より0.3ポイント増えている。韓国も高齢化が進んでいるのである。統計庁では、高齢人口比率を2022年には14%、

2030年には19.3%と見通し、超高齢化社会を迎えるだろうと見ている。これを支える世代の16～64歳層に対する比率を見ると、現在は10人に1人であるが、2030年には10人に3人となる。

また、女性1人が出産する子供の数は、1970年は4.5人であったが、98年には1.48人まで減少している。

(成澤 勝)



日本館便り

nihonkan-dayori

4月から約3ヶ月間にわたりノヴォシビルスクの日本館に滞在して帰国した。一ヶ月以上にわたり温水が利用できずに苦労したのを除けば、アカデムゴロドクでの生活は順調であった。この間ロシアでは新しい大統領プーチン氏の就任式が行われ、その後彼が繰り出す矢継ぎ早の政策とそれに対する国内の反応を地方から観察することができた。ペレストロイカ以降10数年の社会的、経済的混乱状況から脱却し新たな仕組みを構築しようとロシアは模索しているが、歴史を専攻している私にとっても、新たな指導者の出現とその政策はロシア国民同様大きな関心をひく問題であり、『シベリア通信』その他で現地からの情報を日本に伝えようと試みた。

強力な法治国家の構築を目差す大統領は各管区に大統領直属の総督を派遣するというプランをすぐに実行に移し、地方の首長を地方での仕事に専念させるための上院の制度改革は上下両院で承認された。外交面では中国、北朝鮮を訪問して沖縄サミットに参加したプーチン氏の発言には各国が注目した。本会議後、債務の問題

があるとはいえロシアは実質的にG8の仲間入りを果たしつつあるという意見も聞かれるなど国際舞台へのデビューを彼は無難にこなしたように思われる。またサミットの前後にアムール州と、エネルギー問題が深刻なカムチャツカ州を訪れて地方当局や住民と意見交換したことも若き大統領の行動力を示している。

国内外における彼の指導力がロシアにおける民主主義的制度のいっそうの充実や経済復興、国際社会におけるロシアの発言力の増大にいかにより具体的に発揮されていくのか否かについては今後も注視していきたい。9月に大統領は訪日するが、平和条約締結に向けて日露関係がさらに発展していくことを望むものである。日露両国のトップによる関係改善の試みはもちろんであるが、地域間の交流強化も重要である。この点ノヴォシビルスク州知事が訪日し各自治体関係者と交流するプランが延期されたのは残念であり、近い将来このプランが実現することを願っている。

(寺山恭輔)

東アジア伝統文化の伝承相を比較する

東北アジア研究センター客員教授／高麗大学教授 徐 淵昊

日本も韓国も伝統文化に立脚した社会を有している。しかし、その文化の伝承の様相は異なる。特に、芸能に視点を当てて比べてみよう。

古い時代から、芸能・演芸のようなものは東西洋において存在してきた。ところが、西洋において芸様式(ars)の変化・分化が速い速度で展開していくにつれ、東西洋間では概念や形式、伝承方法等に差異が生じはじめ、それぞれの特色が顕著になってきた。19世紀中葉からおよそ一世紀のあいだ、東洋ではいわゆる「近代芸術」という意味で、西洋受容、西欧模倣、欧米追従が強行され、この過程において数千年の芸伝統の多くが傷つけられ、あるいは失われた。芸術は個性と創意性に裏付けられた新たな形態であるが、芸能は匿名的に反復される技能であり、さらに演芸は大衆的で低劣な娯楽として扱われてきた。相対的に西洋的形式を上位・上質に置く歪な認識が拡散したのもこの時期であった。1960年代以降、東西洋の交流が繁くなり、また拡大していく中で、互いに相対的な観点から価値や伝統性を認識し

いては尊重するようになるが、こうした文化相対主義に基づいた、人類に普遍的なものとしての芸能(performing arts)が注目されてきた。

韓日両国は悠久の歴史の中で、芸伝統を共有する部分があるという点で非常に稀な事例である。のみならず、今日東北アジアにおいて芸伝統を保存・伝承する国という点から見ても世界的に宝庫である。シルクロード文化・古東北アジア文化・中国文化のさまざま原型が韓日両国においてたびたび発見され、確認される現実に専門家たちは大いに関心を寄せている。

ところが、視角を換え、長い歴史を通じて伝承の現

場を支えつづけてきた人々に目を向けてみると、我々両国の先祖たちがそれぞれの芸能の原型を継承するために流した汗、忍苦の長い時間、あるいは彼らの高潔な精神力は、なかなか現代の人々に理解されずにいる。まさしく文化危機といわざるを得ない。東洋の芸能は楽・歌・舞・詞・伎の総合である。いずれか一つの要素が抜けても調和が損なわれる。芸能が集団的であるのはこうした理由による。集団化は自ずと父子伝承・

師弟伝承・現場伝承・状況伝承を生む。個人的な才能や技術のみならず、地域・経済・環境・状況・身分・材料等から多分に制約あるいは拘束を受けざるを得なかった。近代化の干渉から芸能集団を保護し、更には宣揚すべく、戦前日本で制定したのが無形文化財制度である。続いて、韓国及び台湾でもこの制度をほぼそのまま受容し、施行している。芸能保有者たちこそが「現代に生きる古典文化」というべきものである。もちろん、制度によって指定された芸能保有者以外にも韓日両国には数多くの芸能あるいはその集団が伝承され



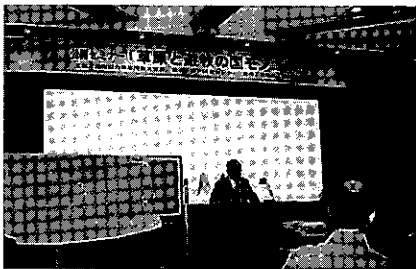
韓国における人形劇の伝承者たち

てきている。昨年4月筆者は台湾国際偶人芸術祭に参加し、研究発表を行った際、東西各国の人形劇を見たことがある。日本の四国地方の人形劇、台湾の布袋戯、そして韓国のコクトゥガクシ人形劇を比較しながら、特にアジアの芸能の優れたところや独創的なところをあらためて発見した。芸能集団を保全し、継承することは国家的な責務であり、また非常に困難な課業である。とりわけ韓国の場合は危機に瀕しているといわざるを得ない。それを支えるはずの民衆の関心の方向は如何ともしがたいものがあり、また政策的な善処にも限界がある。

● 最近の講演会

◆公開シンポジウム

5月13日(土)
午後2時より仙台
国際センター3階
中会議室において
公開セミナー「草
原と遊牧の国モン
ゴル」が開催され
ました。



同セミナーは、
国際協力事業団 (JICA) 東北支部と東北アジア研究センターの共
催によるもので、久保田眞司前モンゴル駐在大使の講演と、岡洋
樹・本センター助教授をはじめとする3人のパネリストによる報
告とパネルディスカッションが行われました。

当日は雨模様の中にも関わらず、会場には約80人の参加者が
集まり、モンゴル紹介の講演と報告に耳を傾けていました。

セミナーは、香川敬三・JICA東北支部長代理(前駐モンゴル大
使館一等書記官)が司会をつとめ、最初に石井和男・国際協力事
業団 (JICA) 東北支部長の挨拶と事業の紹介、徳田昌則・東北ア
ジア研究センター長の挨拶とセンターの紹介が行われたあと、次
の講演と報告が行われました。

講演：久保田眞司・前モンゴル駐在特命全権大使
「草原と遊牧の国に使いして」

報告：岡 洋樹・東北アジア研究センター助教授
「日本とモンゴル：歴史と課題」

S. ジャルガラン・東北大学理学研究科博士課程
「「モンゴル地質鉱物資源研究所」プロジェクトとモン
ゴルの金鉱床」

後藤 仁・帯広畜産大学名誉教授
「家畜感染症診断法の改善」

報告のあと、一般からの質問・意見を受け、討議が行わ
れました。

◆学術講演会

「遣日使節レザノフの日本語辞書にみられる仙台弁」
(ボンダレンコ・天理大学教授)

6月20日、本センターの共同研究「前近代における日露交流資
料の研究」の一環として、天理大学客員教授ペトロビッチ・ボン
ダレンコ氏による講演会が開催された。

レザノフは1804年、日本との交易を求めて長崎に来航したが、そ
の船にはロシアに漂着して10年ぶりに帰国する石巻の船員4人が乗
っていた。ボンダレンコ教授は、船員津太夫らの見聞録「環海異聞」
に収められた「日露辞書」と、レザノフが彼らの協力を得て作った
「日本語辞書」を比較検討した。両辞書には、船員たちが数年にわ
たって生活したシベリアのイルクーツク方言が採録されており、ロ
シア言語学にとって貴重な史料であること、また船員の出身地である石巻・仙台地方の言葉も収録されており、江戸時代の方言研究にも役立つものであることが確認された。



ロシア言語学にとって貴重な史料であること、また船員の出身地である石巻・仙台地方の言葉も収録されており、江戸時代の方言研究にも役立つものであることが確認された。

「老子とトルストイ」(キム・レチュン教授)

2000年6月24日(土)、仙台市戦災復興記念館にてキム・レチュン東北アジア研究センター客員教授(筆名キム・レーホ、ロシア科学アカデミー世界文学研究所首席研究員)を講師に迎えての公開講演会が開催されました。キム教授は日-露を中心とした比較文学の研究に長年携わってこられ、現在ロシアの世界文学研究の指導的地位にある方です。またキム教授はロシアとアジアの比較思想の研究にも従事してこられ、今回の講演では特にそうした視点からロシアの文豪・思想家トルストイに関して興味深いお話をしていただきました。キム教授によれば、ロシアでは、モンゴル支配からモスクワ公国が成立したという歴史的背景から、ロシア文化の中にアジア的要素を見ようとする「ユーラシア主義」がありますが、これに対して「西欧派」と呼ばれる人々は激しく反発します。しかし、ロシアを代表する文豪トルストイ自身が晩年になって、生涯において『老子』には『福音書』と並ぶ巨大な影響を受けたことを明らかにしています。また、トルストイが初めて『老子』を手にしたのは『戦争と平和』の完成後10年も経ってからのことですが、実は『戦争と平和』にもすでに深い東洋的思考が存在し、同時代の評論家シュルグノフがそれに注目して「トルストイの主張するすべては私たちの習った近代思想家たちの考えとまったく違う。誰が正しいか? オギュスト・コントかトルストイか? 西洋か東洋か?」と問うていたのです。しかしキム教授は、トルストイは西洋と東洋を対置するのではなく、機械文明が現代の価値観を支配する今日において東洋の思想は根本的な意義を持つと主張して止まないのだ、そして、そう考えるトルストイを念頭に入れてその文学遺産を再読、再考する時が来たのではなかろうか、と締めくくられました。

講演は極めて熟達した日本語で行われ、また従来のロシア文学の理解にはなかった重大な文明論的論点を提示するものであっただけに、大学内外から参会した多くの聴衆に深い感銘を与えました。



「宿主・寄生者の軍拡競争における行動的防御」
(モシキン教授)

2000年6月28日(水) 午後1時30分より、東北大学川北キャンパス川北合同研究棟4階会議室において、上記の題名でM.P.モシキン教授による講演会が開催されました。

モシキン教授はロシア科学アカデミー・シベリア支部・動物分類生態学研究所副所長で、今年4月から7月までの4ヶ月間東北アジア研究センターの客員教授としてセンターで共同研究を行っています。

モシキン教授はシベリアに生息するネズミ類について生理学的な切り口からの生態学の研究を行っていますが、今回の講演では病原菌に感染したばらねが神経内分泌系を介して行動や匂いなどが変化するにより、同種他個体との接触が減少し、結果的に感染が防御されることを、マウスやシベリアン・ハムスターを使った事例について紹介されました。更に、仙台に来てから歯学部で行った特定の遺伝子を欠損させて作ったノックアウトマウスを用いた最新の成果についても、ビデオ画像を示しながらお話になりました。

センター動向

本年7月～9月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

【国内から】

- 渡邊幸治 (ワタナベ, コウジ) 教授：経済団体連合会特別顧問・元在ロシア連邦日本国特命全権大使、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹 (エナツ, ヨシキ) 教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 横山隆三 (ヨコヤマ, リュウゾウ) 教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- 徐淵昊 (ソ, ヨノ) 教授：韓国、高麗大学校文科大学教授、東アジアの儀礼・芸能における身体と社会の表象に関する共同研究
- MOSHKIN, Mikhail P. (モシキン, M. P.) 教授：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部動物

分類・生態研究所副所長、小型哺乳類の個体群生理学

- 陳春林 (チン, シュンリン) 研究員：中国、廃棄物溶融炉の炉内解析に関する計算機シミュレーション
- BARINOVA, Anna A. (バリノワ, A. A.) 研究員：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部細胞・遺伝学研究所研究員、東北アジア地域における淡水動物の遺伝的多様性に関する研究
- TARAN, Georgui S. (タラン, G. S.) 研究員：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部中央植物園上級研究員、ノア・データを利用したオビ・イルティシ川氾濫原植物群落の分布構造の解析とデータベースの構築
- 朴慶洙 (パク, ケンシュ) 研究員：韓国、江陵大学校人文大学副教授、仙台藩商人資本の研究

(柳田賢二)

東北アジア研究センター客員教授紹介

--- 徐 淵昊 (ソ・ヨノ) 教授 ---

7月12日から10月11日までの予定で、高麗大学の徐淵昊教授が着任した。同教授は専門が民俗演劇学であるが、その延長で演劇学全般・民俗学全般と領域は広く、特に日本と朝鮮との演劇交流(日本の新派演劇の朝鮮への伝播の問題)で1982年に学位を取得している。また、現在韓国に伝存する仮面劇に関しては網羅的に整理・研究し、5部作にして著している。また、文化の伝承という角度から民俗学にアプローチし、その方面でも実証的研究を重ね、『韓国伝承演劇の現場研究』といった著述に成果を提示している。50歳代で既に学会をリードし、目下韓国演劇学会会長・韓国民俗学会副会長の任に当たっている。

一方、こうした業績が評価され、韓国の現政権下での対日文化交流政策策定の要衝たる「韓日文化交流会議(座長池明観氏)」の事務局長を任され、日本側の「日韓文化交流会議(座長平山郁夫氏、副座長三浦朱門氏)」と共同で日韓友好のため政策提言に務めている。

本研究センターでは同教授のこうした広範な活躍に注目して、東北アジアの儀礼芸能研究方面での研究成果を確実なものとしていく一方で、21世紀東北アジアの安定と繁栄に向けた新たな日韓の役割を考える作業をともに進めていく。

(成澤 勝)

活動風景

今期(5・6・7月)は研究会の開催が続き、ために本研究センター全体が活気を呈した。特に本年度から始まる共同研究プロジェクトが軒並みにそれぞれの第1回研究会を持った。『東北アジアにおける民族移動と文化の変遷』は4月の「ツングース研究班」に続いて、5月20日には「テュルク研究班」の第1回定例研究会が催さ

もう一つ文理融合型の試みとして環境研究が始められている。東北大学大型計算機センターと共同の『ノア・データの



白頭山噴火活動史をめぐる白熱した討論

利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究』は気象衛星ノアのデータを用いてシベリアや中国及び日本などの環境問題などについて、文系と理系が連携して学際的研究を進めようとするもので、すでにシベリアとモンゴルについてはノアデータの一部を画像データとしてホームページに掲載し、利用に供している。この第1回研究会が6月17日に開かれ、工藤純一大型計算機センター助教授(本研究センター兼務)により「ノア画像処理データの研究利用上の問題点」について報告願った。さらに6月23日の『モンゴルの草原に関する総合的研究』においては本学工学研究科や理学研究科の専門家をも招いて第5回研究会が開催され、7月に入って『古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証』の研究会が第8回(14日)第9回(25日)と連続して開かれた。第8回では高麗大学から本研究センター客員教授として来ている徐淵昊氏が「韓国における伝統祭祀儀礼の類型」について報告、また第9回では生理学が専門の刈田啓史郎歯学研究科教授(本研究センター兼務)が「生理学から見た東北アジアの民族」というテーマで研究発表した。いずれも、ツングースの枠組みを考える上で重要な問題を提起した。(文責/成澤 勝)

活気づく共同研究活動

れ、北海道大学スラブ研究センターから坂井弘紀氏を招いて「テュルク系民族の『民族文化』とは何か―口承英雄叙事詩を中心に―」というテーマで報告願った。さらに5月27日には中国地震局地質研究所から魏海泉助教授を、そして韓国の高麗大学からは劉永大教授を招いて、『中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史効果』の第1回研究会を開催し、「長白山天池火山の地質学的背景と火山活動史」、「中国朝鮮族・満族に伝わる長白(白頭)山伝承について」というように文理両面からの検討を試みた。特に文献や伝説上から噴火の跡をなぞろうとする試みは注目された。

編集後記

ニューズレター前編集委員長成澤勝教授から引き継いで1年間編集をつかさどることになったが、なにぶん不慣れで種々の不都合があったことをお詫び致します。

(北風 嵐)